

ふたなり天使様と逆アナルの試練に堕ちる信徒君

プロローグ

ウリエル「ああ、至上なる神の使徒になるために集まって……なんて可愛らしいのでしょ……そうは思いませんか？ エリス」

エリス「ええ、ウルト……四年に一度の試練の儀式にふさわしい子ら、ですわ」
イリス「ふふふ……本当に、皆さん可愛らしいこと……」

ウリエル「あらあら、皆さん緊張していますね、イリス？ この子らに説明を……短めをお願いしますね」

イリス「はい、姉さま。」

それでは神に仕える使徒の私、イリスが試練について告げます。

人の子らよ、傾聴なさい。

……とは言っても、試練とはここからそれぞれの天使と共に試験の部屋に進み、

私たちが課す試練に耐えきって聖印を授かる……

というとても単純なものです。不安になる必要はありません、

あなたたちがこれまで励んできた成果を見せれば、道は開かれるでし

よう」

ウリエル「それでは、私はこちらの子を……」

エリス「まあ、ちよつとせつかちじゃないですか？ ともあれ、私はこの子で」

イリス「……もう、姉さまたち、はしたないんだから……」

それじゃあ……キミは私が担当してあげる。大丈夫、キミ、とっても

私の好みだから……ふふふ……」

シーン1

「ここはお清めの儀式の間、試練に入る前に肉体を清らかにする場所です。つまりは、キミの体を綺麗にすることが目的ですね。神聖な試練を受けるために、必要がある行為だと思ってください」

「水浴びではなく、温めのお湯を使って体を洗うだけです。信徒くんは私の指示に従ってくれば大丈夫ですよ」

「では、さっそく、服を脱いでくださいね」

「……どうしました？ 私の前で裸になることに抵抗がありますか？」

「大丈夫、何もやましいことはないですよ？ ただ体を清めるだけなのでから。少し恥ずかしいのかもしれませんが……必要な儀式ですので、ちゃんと脱いで体を清めましょう」

「はい、いい子です……ふふ」

「それに……キミだけが脱ぐわけじゃないので、何も問題ないですよ？」

「ええ、もちろん……私も服は脱ぎますし、裸で儀式の間に向かいます。そうでないと濡れてしまいますからね」

「準備ができたので、湯舟の方に行きましょうね、はい手を貸してね」

「滑らないように気を付けてください」

「私が先に湯舟に入りますので、キミは私の手を掴みながら中にどうぞ」

「ふう……冷たくもなく、熱すぎない温度、という感じですが……キミも大丈夫そう、ですね。そのまま座っていてください、お湯で体を流していきます」

「腕も、背中も、胸も……満遍なくお湯にかかるように、していきますね……ふふふ」

「あらあら、肩ひじに力が入ってるみたいですよ？ 緊張していますか？ 大丈夫です、まだ何も始まってもないのですから、少しリラックスしましょうね」

「はい、これでもう大丈夫」

「体をよく拭いて、次にあることをすれば、お清めの儀式は完了です」

「あらあら……何か気になっている感じですが……どうか、されました？」

「ああ、私の股間についている……このふたなりチンポがそんなに気になりますか？」

「最終的には、神聖な精液を、出すことができるのですよ。これは、試練を行うための最後の準備、と思ってください」

「はあ……んっ……」

「精液を出したら、どうなるのか？ 分からない、と？ 人間であれば……体を震わせるような強い快感を感じてしまうのでしょうか？」

「ですが天使の場合はそれだけではないのです。先ほど言った通り、試練の準備が目的ですから。キミの体に、ぶっかけて、馴染ませる必要がある、ということですね」

「先ほど体をお湯で流したでしょう？ あれは、信徒くんの体に、より多く祝福の効果を与えるためでもあったのですよ」

「使徒となるために必要なこと、なのです……んっ」

「ちゃんと、顔や体……キミの体全部で精液を受け止めれる準備を、しててくださいね……ふふふっ」

「大丈夫、怖いこと、不安なことなどは一切ありません。ただキミは、私がオナニーで果てる姿を見続けていればいいのです」

「はあ、はあ……んあ……いいです、すごく、いいですよ……キミのその真っ直ぐな信仰は、私に届いていますから……んっ……ああ、いい……ホントに、素敵……はあはあ……もうすぐ、もうすぐですからね……」

「目を離してはいけませんよ？ ふふふ……んっ……はあんっ♪」

「あらあら……どう、しました？ 恥ずかしい、ですか？ ふふふ……顔が赤くなってしまうますね」

「オナニーを間近で見るのが、初めてなのですね……んっ。恥ずべきことではない、ですし……キミのために必要なことですから」

「ふふふ……しつかりと、見ていてください」

「はあっ……んんっ……信徒くん、もっと、見て、見てください……んんっ……」

「はあはあっ……恥ずかしくても、目を離しては、いけません、からあっ……くっ……ううっ……今は、キミの信心の深さが、試されて、いるのです」

「ふふふ……」

「大丈夫ですよ、このくらいすぐに慣れますからね……」

「はあ、はあ、んあっ……はあ、はあ……あ、んあ……フー、フッー、んっ……ああっ……大丈夫です、はあはあ……私は、大丈夫ですから」
「心配してくれているのですね……ふふ」

「息が荒くなっているのは、そうする必要があるから、なのです。信徒くん……祝福を、授けるために、不可欠なこと、だから……んんっ……ああ……んっ、んあっ、はう……っふあ、んんっ♡!!……はあ♡」

「ふふ、ふふふふ……ああ、目を逸らさずにちゃんと見てくれているんですね。偉いですよ……信徒くん……素直で、従順で……とても素敵だと思います」

「あらあら……ふふふ♪」

「それにただ、ボーっと見てるだけではなく、熱心に見てくれているのも分かりますよ♪ ふふふ、その証拠にキミも興奮してくれているみたい、ですからねえ……♪」

「かわいい、おちんぼを勃起させて……♪ ええ、ええ……恥ずかしがることはありません。これは当たり前のことなのです……ふふふ」

「私のオナニーを見て、キミの体が反応しているのですから」

「……え？ 初めての勃起なのですか？ まあ、それはそれは……とてもいいですよ」

「なんと素敵なことなのでしょう。キミの初めての勃起は……私のふたなりちんぼオナニーを見てしまったから……なのですねえ……♪」

「いいですよお……♪ とてもいい、ええ……ホントに……んっ……はあ、はあ……私もすごく嬉しく、なっってしまったですよ……♪ はあ……はあ……んっ♪」

「おちんぼも、元気になってしまいますう……んうっ♪ はあはあ……もつと、見てください……音を聞いて……匂いを嗅いでください……♪全身で、感じてくださいねえ……んあっ♪ はあ……んんっ♪」

「私のオナニー、目を逸らさずに見ることが、今キミができる唯一のことなのですよ……ふふっ♪ そうすること……今後の、キミのために、必ずなりますので……」

「んあっ……ううっ……ああ……♪ 精液が、どんどん上がってきているのが、分かります……♪ はあはあ……信徒くんのおかげで、私ももうすぐ達することができそうですよ……」

「お清めの儀式の、仕上げと行きましょう……はあ、はあ……くうっ。おちんぼが、もう止まらなくなってきましたあ……はあ、はあ……もうすぐ、出ます、からあ……はあ、はあ、んんっ……」

「精液、たっぷり出してあげますねえ……♪」

「んっ……キミの顔に、ちゃんと、かけてあげますから……精液を浴びることで、ようやく一歩、使徒に近づくことが、できるのです」

「はあ、んんっ♪ 射精の瞬間を、よく見ておいてくださいねえっ♪ んんっ♪ ああっ、もつと、もつと見るのですっ♪」

「このパンパンに張ったおちんぼの先から、神聖な精液が飛び出してきますよお♪ たっくさん、出してあげます……♪ はあはあ、んんっ♪ キミの顔を真っ白にするくらい、いっぱいかけてあげますねえ……♪」

「ふふっ♪ ふふふっ♪ んんっ♪」

「ハアツ、ハアツ♡!! ふあツ♡♡!!……ん! ふう♡! ふうっ♡!!……はふ、ん♡……キミのために射精するのですから、そのすべてを受け入れてくださいね♪」

「大丈夫、全然怖くなどないですよ?」

「初めての経験でしょうから、ちよっとビククリするかもしれませんが、すぐに慣れます♪ そう、すべてを受け入れるのです……んんっ♪ 精液を、受け入れてください……はあはあ……んんっ♪」

「身も心も、神のために捧げるのです……ああ、んんっ……♪ これはキミが使徒になるために、必要なこと、ですからあ……んんっ♪ん ふあっ♡!!……んっ、んあっ、はう……っふあ♡」

「はあ、はあ、もうっ……出ますう……もう、ダメえっ♪」

「あっ、ああっ! 精子出ちやいますっ……んんっ♪」

「出るっ、出るっ、出るうっ♪ んんっ♪」

「しっかりい、受け取って、くださいねっ! んっ、あああっ♪」

「あっ♪ ああっ♪ 出てるっ♪ いっぱいっ、出てるのっ♪ んんっ……ああっ……はあ……信徒くんの顔に、いっぱい……ああっ、体にも……こんなにとくさん……♪ 私の精液が、かかっていってますう……♪」

「射精、止まらない……♪ はあ、んんっ……はあ……♪ んんっ……天使の射精をお……しっかり、受け取るのです……んあっ、はあ、んんうっ♪ 飲み込んでしまっても、大丈夫、ですからねえ……んあっ♪」

「キミを使徒にするために、とてもいいもの、ですので……はあ、ふう……ふふっ♪」

「くっ……ああ、ようやく、出しきりました……♪ はあ、ふう……ちゃん
と、受け止めることができましたね……これならば……ふふふ……♪」

「はあ……ふう……んっ♪ これで、身も心も……お清めができました。神よ
り賜りしふたなりチンポ……♪ その精液をキミは全身に浴びれましたね。神
聖な精液が肌から、吸い込む呼吸から……キミの体に馴染んでいくことでは
う」

「さあ、最後に……このおちんぽに、聖根に誓いのキスをしてください」

「……できますよね？」

「……んっ♪ はあ、いいですよ……ふふ、ふふふふふ……これで、お
清めの儀式は、完了、となります。よかったですね……はあ、ふう……ようや
く、試練を受けるための資格が、整いました」

「いきなり、顔や体にかけて、ビックリしましたか？。これも必要な行為
なのです、ちゃんと待てができたキミは、とても偉かったですよ……♪」

「ともあれ、これで初めての祝福を与えることができました。凄いですよ？
天使の祝福……♪ これを受け続けたら、そのままの姿で私とずっと、永遠に
一緒に居続けられるようになるんです」

「とても素敵なことだと思いますか？」

「これからは何度も浴びることになりますので、早く慣れるようにしまし
ょうね。大丈夫です、最初はちよっぴり怖かったり、不安だったりしたかもしれま
せんが……キミはきちんと終えることができましたでしょう？ ふふふ……だか
ら、何も問題ないのです」

「恐れることはありません、だってこれは使徒になるための試練なのですから

……♪」